

---

# 無知の妖怪、未知の境界

TS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無知の妖怪、未知の境界

### 【Nコード】

N7286R

### 【作者名】

TS

### 【あらすじ】

高校生の春雨晶はるなめあきひは犬牛という名の妖怪であり、唯一無二の存在である。しかし、それを証明する手立てはなく、自身がただの狂人ではないかと頭を悩ませていた。しかし悩みの種はそれだけではなく、間の抜けた自称“巫女”や人を食べると噂の同級生、さらに怪現象が晶に襲い掛かる。そして邂逅する本物の“妖怪”。「私に何か用かい？」唯一の癒しは愛しの妹のみ。けれど晶はあきらめない！ 大層なタイトルのわりに内容は非常に軽いです。また作者は妖怪に関して専門的知識を有しておりませんので気軽にお読みく

ださい。

一、汝は犬牛。哀れな招かれざる客人である（前書き）

（2011/07/16修正）

一、汝は犬牛。哀れな招かれざる客人である

春雨晶はるなせうりゅうは妖怪である。

それを僕だけが知っている。

僕 春雨晶だけが。

僕は生まれついての妖怪だった。

自覚したのは、母の体内から外へ出た瞬間。

驚いたような顔で僕を見つめる周囲の存在が自分とは全く違うものだと、まだ言葉を話せない赤ん坊の時にそう感じたことを覚えている。

犬牛。それが僕の妖怪としての名前だ。

誰もそれを知らない。僕だけが知っている。

もやはただの妄想の域でしかないその認識を、けれども僕は信じている。

人と変わらぬ身でありながら、何の特別も持っていないくせに。

気が狂っている。

人が聞けばそう思う。僕も時折そう思う。

本当は僕がただ狂っているだけなのではないかと。

僕は妖怪に出会ったことなど一度としてない。

それでも、僕の中の何かが告げている。お前は人間ではないのだと。

だから、誰かお願いだ。

僕が狂ってなどいないと証明をしてくれ。

誰か僕に「お前は人間じゃない。妖怪だ」と言ってくれ。

これまで、そんなことを言ってくれた奴は誰もいなかった。もうすぐ僕も高校生だ。そこで新しい出会いもあるだろう。

そこには、いるのだろうか。

僕を妖怪と呼ぶ、そんな運命の誰かが

「殺しに来たわ 妖怪」

扉が勢いよく開け放たれたかと思うと、そんな険呑な言葉が飛んできた。

声が出た方へ目をやると、そこに長い黒髪を背に垂らした見目麗しい少女がいた。

僕にはその姿も言葉も、日も暮れかけた高校の小さな一室には似つかわしくない非現実的なもののように感じられ、少しだけ妬ましく思った。

僕は彼女に聞こえないぐらいの小さな溜息をついた。声に出したわけではないが、僕が歓迎していないことには気が付いたのか、少女は常より鋭いその瞳を、より細く歪めてこちらを睨んだ。

僕は内心でもういちど溜息をつくと、彼女を無視して手に持った読みかけの文庫本へ視線を落とした。正直に言うと彼女とは関わり合いになりたくなかった。

彼女と出会うのは今日が初めてではない。こんな不躰な訪問も何度目だっただろうか。僕は過去を回想し少し憂鬱な気分になった。

少なくとも僕と彼女は親しいとか仲睦まじいなどということはない、僕からしてみれば面倒で厄介な存在だった。

本来ならば彼女を歓迎すべきなのだ、僕は。なぜなら、彼女は僕を“妖怪”と呼ぶから。

なのに彼女を拒絶してしまうのは、けして僕だけの責任ではないと思う。色々あった結果、僕は彼女に対して上手に立ち振る舞うことができない。

ここにはいま僕と彼女しかいない。

いまも本を読んでいるように見せかけているが、脳にはいつさい文章は入ってこないし、彼女からの痛いまでの視線だってしっかりと感じている。

それでも、僕は顔を上げず、本を読んでいるふりをする。

少女がこちらへ歩き出した。

見ていないけれど、なんとなく少女がどんな表情をしているのか、僕には予想が付いた。

冷たい視線で僕を見据えているのだろう。眉間には大きな皺だつてよつているかもしれない。口はへの字に引き結ばれているだろう。普通の女性がそんな顔をしてても不細工なだけだが、美人は不機嫌な顔でも絵になるのがお得だ。ただし、それを向けられた相手は訳もなく罪悪感のようなものを感じてしまうのだということを知りたくもないのに僕は知っていた。

僕の視界に、彼女の細く白い足が映りこむ。

椅子に座っている僕は、自然と間近に迫った彼女に見下ろされる形になり、頭にむず痒い感触を覚えた。

そのまま無視をしたかったが、先ほどから本のページをめくる手は止まっているので、彼女も僕が本を読んでいることには気が付いているだろう。

僕は本を閉じ机に置くと、諦めて顔を上げた。そこにあつたのは、僕が予想していた通りの、怒ったような表情だった。僕はそれに臆しそうになったが、意を決して声をかける。

「……何か、ご用ですか」

「用？ もちろんあるに決まってるじゃない、妖怪」

「えっと、妖怪じゃなくて春雨晶って名前があるんですが」

「ふん、妖怪の名前なんて知ったことではないわ。妖怪のくせに人間様の名前を拝借しようなんておこがましいにもほどがあるわ。死になさい」

こちらは下手にでたのに、返ってきたのは罵倒交じりの辛辣な言葉だった。

そう返ってくるとは予想していたが、ここまで自然に死になさいと言われると、怒りよりも呆れるような感情のほうが強かった。

彼女に死になさいと言われると、なんだかこちらが悪いことをしたような気になるから不思議だ。

僕が性格的に情けないということもあるが、彼女の容姿によるところも大きいだろうと思う。

細身の長身に、枝毛すらない流れるような長い黒髪。さらに鼻梁びりょうの線がはつきりとしているためか顔が引き締まって見える。それらが合わさり相乗的に少女を美しく見せている。

ただ、彼女の整い過ぎた顔は美しいがどこか人形じみており、あまり笑わないことも相まってか、周囲に冷たい印象を与えている。

ある男子生徒はそれがいいと豪語していたが、少なくとも僕は彼女に睨まれるだけで寿命が縮む思いがするので勘弁願いたい。

僕が無遠慮に彼女を観察していると、何を勘違いしたのか胸を抱くように腕を交差させ後じさりをした。

「っな、何をじろじろと見ているの！ き、気色の悪い妖怪ね。死

になさい。死に尽くしなさい。気持ちが悪い。反吐が出るわ。謝罪なさい」

「すいません」

矢継ぎ早に飛んでくる暴言に、つい反射的に謝ってしまった。

ただ、誤解のないように言っておくが、彼女はまるで僕が胸を見ていたかのような反応だったが、誓ってそんなところに目をやっつてないし、やましい気持ちも一切なかった。

そもそも、その平坦な胸のどこを見ろというのか。あと死ぬ死ぬ言い過ぎだし、むしろそっちが謝るべきじゃないか。

などと、心の中だけで呟いた。声にだして言えるほどの蛮勇は僕にはない。

少女は僕を罵倒して溜飲が下がったのか防御姿勢を解くと、本来の目的を思い出したのか（思い出さなくてもいいのに）再び最初の用件に戻った。

「と・も・か・く。妖怪は死ぬべきなの。なんなら自害でもいいわ。お手軽気軽にその窓から飛び降りて自害なさい」

そう言っつてひょいと窓を指さす。  
できるかつ。

「いや、それはちよつと」

「煮え切らないわね」

不満そうだが、当然だ。

そんな要求を飲めるのは自殺志願者かよほどのマゾヒストぐらいだ。

「男ならさつさと決めなさい。生き恥を晒すぐらいなら死んだ方がいいわ。かのナポレオンもそう言っていたじゃない」

「ナポレオンには詳しくないですが、おそらく言っつてないと思います」

「言つてたわよ。……あれよ、あの有名な“余の辞書に不可能の文字はない”つていうのは『万が一不可能があつたら生き恥だから俺さっさと死ぬわ、マジで』とかそんな感じの意味なのよきつと」「勝手に偉人の言葉を拝借したあげく、捏造まで始めた。というか「きつと」とか「感じ」とか曖昧な時点でナポレオンのことあんまり知らないだろ。」

しかし、彼女はいいこと言つたとしても思っているのか、なぜか僕を期待のこもつた目で見ている。

自分がいいこと言つてやったのだから飛び降りるだろう、とでも思っているのだろうか。

例えどれだけ彼女が素晴らしいことを言つたのだとしても、飛び降りるという選択肢は絶対でない。

だというのに、彼女は一向に飛び降りない僕がお気に召さないらしく、再び不満そうな顔へ移行したかと思つと、

「こつなつたら……最終手段よ！」

などのたまつた。

ずいぶん早い最終手段である。

まだ罵倒しかされてないんだけど。

僕が呆れながらそんなことを考えていると、彼女は突然自分の服に手をかけた。

めくれた裾からわずかにのぞいた白い肌に、思わず目が行く。彼女に対してやましい気持ちなどないが、健全な青少年としては美少女の素肌というものに目移りしてしまうのは仕方のないことだ、と僕は自己弁護をした。

しかし肌が見えたのは一瞬で、彼女は服の内側から変な紙を何枚か取り出しただけだった。言つておくが僕は全く残念だなんて思つていない。

ともかく、彼女は妙な紙を取り出したかと思つと、それを僕にべ

たべたと貼り付け始めたのだ。

いきなりの奇行に思考が停止しかけたが、彼女の手があらぬところまで伸びそうなのに気が付き、僕は必死で抵抗した。

「ちょ！ ちよつと、やめてください！」

「んっ、動かないですよ。お札が貼れないじゃない」

「だから貼らないでくださいよ！ ちよつ、顔はやめ、ってつぶ」

「ふん、だまって貼られなさい、悪霊退散よ！ 退散！」

「だからやめ、って、悪霊じゃなくて妖怪でしょうが」

「あつ、ちよつと！ はがさないですよ、というかやつぱり妖怪なんじゃない！ やつと認めたわね、この妖怪！」

「だからあ」

お互い取っ組み合うように激しく暴れる。その拍子に机に体がぶつかり、バサリと本が落下した。

この過剰なスキンシップは、ある意味女性からのセクハラであり、人によってはご褒美なのかもしれないが、どちらかと言えば嬉しいというよりは恥ずかしいという気持ちのほうが強いわ僕にとっては罰ゲームでしかなかった。

必死に抵抗をするが、女性に暴力を振るうわけにもいかず、手で彼女が触れるのを防ぐぐらいしか方法がない。

それにしても、あまりにも無防備に接近しすぎではないだろうか。ひよつとして妖怪だと思っっているから、男として意識してないのだろうか。

とにかく、このままでは色々やバイ。どうにかしなければ、と焦燥感駆られた僕は、とっさに彼女の両手を掴んでいた。

「なっ、なにをするの！ こ、このヘンタイ！ 警察呼ぶわよ、警察！」

顔を真っ赤にしてそんなことを言う少女。

僕から逃れようともがくが、意外と非力なのか僕程度の力でも容易に抑えることが可能だった。

まったく手を離そうとしない僕を恨めしげな眼で見る。少し涙目だ。

しかし彼女以上に混乱しているのは僕の方だった。

彼女の顔が僕の鼻先に触れそうなほど近くにあるとか、彼女の手が少し乱暴にしたらだけで折れてしまいそうなほど華奢だとか、頬を染め瞳に一杯の涙を溜めている姿が普段とのギャップで異常に可愛く見えるとか、そんなことが重なって、僕はもうどうしていいのかわからなくなっていた。

困り果てた僕が神に祈りを始めたころ、神がそれを聞き入れたのか、聞きなれたチャイムと共に校内放送が流れた。

『まもなく、最終下校時刻です。生徒はすみやかに帰宅してください』

最終下校時刻を告げるアナウンス。それを聞いた瞬間、はっとしたように彼女は僕から視線を逸らし壁の時計を確認した。

僕もそれをきっかけに彼女から手を離す。自然と下に落ちていく彼女の手首は少し赤くなっており、僕は申し訳ない気持ちになった。謝ったほうがいいだろうか、と僕が考えていると、彼女はふうとどこか安心したように息を吐いた。

「ふん……時間切れね」

彼女は悔しさを滲ませた声でそうつぶやくと、踵を返し出口へ歩いていく。

助かった。いろんな意味でそう安堵していると、彼女は扉の手前で一旦立ち止まり、こちらを振り向いた。再び鋭い視線をこちらに向ける。思わず身構える僕。

「今日は 見逃してあげる。けれど明日こそはあなたを殺してみ

せる。あなたを殺すのは、この“原井、玉恵”よ 覚えておきなさい」

どこぞのライバルキャラのようなセリフを吐き捨てる、彼女は急ぐように部屋から出ていった。先ほどのやりとりなどなかったかのような、潔い退場だった。

開け放たれたままの扉を数分ほど眺め、彼女が戻ってくる気配がないことがわかると、緊張していた全身の筋肉が弛緩し深い溜息が漏れた。どうやら今日の危機は脱したようだ。異様に疲れた体をぐったりと椅子に沈み込ませ、天井をぼんやり眺め考える。

彼女が唐突に現れて変なことをするのはいつものことだったが、今日はいままで以上に焦らされてしまった。

これまで僕が助かってきたのは、彼女がなぜか最終下校時刻を律儀に守っているからだ。

彼女は本当に僕を殺す気があるのだろうか。よくわからないことはされるが、直接的な暴力は振るわれたことは一切ない。

だからこそ、僕も彼女をどう扱っていいのか、どこまで踏み込んでいいのか計り兼ねていた。

本音を言うならばもう来てほしくはない。

でも、彼女は明日も来るだろう。

「どうしたもんかねえ」

僕はくたびれたようにそうつぶやくと、床に落ちた本を拾った。

それから気分を入れ替えようと立ち上がり伸びをする。

なんだか、胸がもやもやする。理由がわからず不快な思いでいると、はらりと何かが床に落ちた。

それはお札だった。そう言えば彼女にお札を貼られていたのだと思いだし、体を見るといたるところにお札が貼られていた。もやもやの原因はこれだろうか。

僕の体に貼られていたのは全部で十二枚。気が付かないうちに背中にまであったので驚いた。

そのお札はほんのりと暖かかった。僕の体温か、それとも彼女の体温なのか。

僕は彼女の腕をつかんだ時のことを思い返す。柔らかく細い、そして思っていたよりも熱を含んだ彼女の腕。そして白い肌に残った赤い跡。

そこまで考えて、まさか僕の胸のもやもやは彼女に謝り損ねたからだろうか。そんなことを思ったが、どちらかと言えばこちらが被害者なのに、どうして罪悪感を抱く必要があるのだと、すぐさま否定をした。

僕は本を鞆にしまうと、そのまま部屋を後にした。

窓の外はとうに暗くなっている。女性が出歩くには少し危険なほどに。

「なんとかしないとなあ」

薄暗闇の中、校門にむかって歩く黒髪の少女を窓から見下ろし、僕はそう嘆息した。

結局、僕を“妖怪”と呼ぶ運命の誰かは、むこうから来てくれた。なら、僕がすべきことはもう一步踏み込むことではないか。いまの僕はひどく宙ぶらりんだ。何を怖れているのか。

得難いものを得るには境界を踏み越えるしかないというのに。例

え後戻りができないのだとしても。

無知な妖怪は、今日も未知の境界に怯えて、歩き出すことができない。

明日は僕から話しかけてみよう。

臆病な妖怪は、明日には揺らいでいそつな儂い決意を、今日もした。

一、汝は犬牛。哀れな招かれざる客人である（後書き）

あとがき

どうもはじめまして。TSと申します。

犬牛という妖怪は、創作ですので実際にはいません

二、汝は覺者。無垢なる楊朱は岐に泣く

春雨晶は妖怪である。

けれども、その家族は人間である。

ならば、春雨晶も人間であるべきではないのか。

人間から妖怪は生まれるものなのだろうか。

生まれるはずがないのならば、やはり僕が狂人なのだろうか。

それとも、実は僕が気付かないだけで家族も妖怪なのだろうか。

そんなことを考えたりもするが、実際にはそれは些細なことだった。

なぜなら春雨晶は　僕は家族のことが大好きだからだ。

例え家族がなんであろうとかまわない。

ただ、僕が妖怪であると知ったならば、あるいは狂人であると知ったのならば家族はどう思うのだろうか。

それだけが、いつも僕の心の中で深くわだかまっていた。

暗くなつた帰り道を歩きながら、僕は彼女　原井珠恵の貼つた  
お札を眺めていた。

僕はそれをまじまじとひどく驚いた心境で見ている。

なぜならそのお札は、どう見てもノートの切れ端であり、そこに

はでかでかと小学生のような下手くそな文字で悪霊退散！ と書かれているだけだった。

これで、どうやって妖怪が退治できるのか。そして、のりやテープもつけずにどうやって僕の体に貼り付けたのか。

色々と疑問は尽きないが、考えてもわかりそうにないので鞆に突っ込んでおいた。明日彼女に会った時に返せばいいだろう。

捨てたほうがいいのかもしいないが、これをきっかけにすれば話やすくなるかもしれない。そんな考えもあつてか僕はこのわけのわからないお札を持ち帰っていた。

明日になれば嫌でも彼女に会うことになる。

なぜなら、僕と彼女は同じクラスだからだ。

だが、普段は教室で話しかけられたことはない。そもそも入学してから数日は、彼女との接点など出席番号の関係で席が近かつたぐらいで、言葉すら交わしていない。

彼女と会話したのは確か……そう、僕が先生の許可をもらって“妖怪研究同好会”を発足して、部室に行くようになってから三日目だっただろうか。

今日と同じ調子で、乱暴に扉を開け放った彼女の第一声は今でも覚えている。

『見つけたわ、妖怪』

なんとも不思議な一言だ。見つけたも何も同じクラスなのに。

何かきっかけがあつて僕が妖怪だと気付いたのか。それとも、ただの勘違いなのか。

あの邂逅を果たした時の僕の心中はけして穏やかなものではなかった。

やっと、とか、ついに、という思い。そして、来てしまった。そ

んな複雑な感情を想起させるほど印象的なファーストコンタクトだった。

僕は初めてその時に原井珠恵という人間を認識したのだと思う。それまでは僕にとって彼女は絶対に関わることのない、遠い存在だと思っていた。

彼女は注目を集める存在だ。原因はその容姿だけでなく、中身にもある。

彼女はその容姿から初めのころはクールな女性だと思われていたようだが、時間が経つにつれて化けの皮 いや彼女が意図的に隠しているわけではないのでこの表現は不適切だが、それが剥がれたのだ。

正しく言うならば、皆が抱いていた勝手なイメージが、ガラガラと音を立てて崩れ去っただけのことだ。

実は彼女は勉強が苦手だ。

先生に当てられても大抵は答えることができない。たまに聞こえないふりや、寝たふりをしてやりすごそうとするのだが、あまりに拳動不審な演技なので周囲にはバレバレである。

しかも板書をしているかと思いきや、通りかかったときにちらっと見えたノートには、下手くそな絵で猫のような豚のような謎の生き物の落書きが描いてあった。

更に運動も苦手だ。

以前走るところを見たが、異様に遅かった。一応体力だけはあるのか涼しい顔はしていたものの、何故か何も無いところで二回ほど転んでいた。

そんなことがあってか、皆の中の前井珠恵のクールなイメージは崩壊したのだが、本人はクールキャラをきどっているのか、やたらと尊大で余裕有り気な態度ばかりとっている。

普通なら、どん臭いのに偉そうな奴がいたらいじめられてもおかしくなさそうなものだが、男子曰くそこがいいらしい。また女子も

なんだか放っておけない危なっかしさがあると言って、無駄に世話を焼こうとしている。女子はどちらかと言えばマスコットの扱いで、時折お菓子を与えたり、近寄ろうとする男子生徒を牽制している。

クラスメイトの原井珠恵への評価は、美少女だがどこか抜けていて憎めないキャラ、といったものだろうか。

けれど、クラスメイトすら知らない、原井珠恵の裏の姿を僕は知っている。

彼女は皆が思っているよりもアレな人だ。ぶっちゃけアホだ。

彼女が僕に対して取る行動、つまり妖怪退治は、真剣そのものなのだが、どうにも間が抜けている。

やっていることと言えば、変な念仏を唱える、棒を持って不思議な踊りを舞る、変な液体をぶっかける、なぜか消臭スプレーまでかけられる、と理解に苦しむ行動ばかりだ。

しかも、彼女はこちらの言葉に一切耳を貸さず、ひたすら突っ走る。

妖怪を　　といっても僕のことだが、それを目の前にしても、危機感や焦燥感といったものはまったく感じられない。

だから僕は、彼女が本物なのか、電波だけなのかを判断しかねている。

いつそ彼女が見た目のイメージ通りの、神秘的な万能人間だったのなら、素直に彼女が本物だと信じていたのかもしれない。

まあ、本物だったら今ごろ僕は彼女に殺されているのかもしれないが

そんな考えに至り、体がぶるりと震えた。

たしかに自分の正体は知りたいが、死ぬなどまっぴらごめんだ。

だから、これからも彼女にはゆるいままのへっぴこでいてもらっ

たほづがいいかもしれない。僕はそんなへたれたことを本気で考えながら、家までの道のりを歩いた。

学校から約十分。近さで学校を選んだので、非常に重宝している。

もうすぐ家に着く。そう考えると、さきほどまでのこんがらがったような複雑な思いは晴れ、すっきりとした気持ちになる。

僕にとって家族のいる家がいちばん心休まる場所だ。

あの角を曲がれば我が家はすぐそこだ。

わずかに速まった足で意気揚々と角を曲がると、玄関の灯りにもされた、小さなシルエツトが目に入った。

あれは

「雪姫……？」

「あっ！ おかえりい、おにいちゃん」

「うん、ただいま。ひよつとして僕を待ってたの？」

「うん！ おにいちゃんのおでむかえっ」

子供らしい無邪気な笑顔で、えへへと嬉しそうに笑うのは僕の妹の雪姫だった。

雪姫はいきなり僕の手を握ると、急かすようにぐいぐいと家にひっぱる。といつても小学五年生にしては小さな雪姫に引きずられるほど僕はひ弱ではない。

僕は一生懸命引っ張る妹の愛らしい姿にますます頬が緩む。

「ほら、雪姫。そんなに急がなくても僕は逃げないから」

「むう、でもおにいちゃんのことずっと待ってたんだもん。いつぱい遊ぶんだもん」

頬を可愛く膨らませる妹のいじらしい言葉に胸が熱くなる。

僕はなんて可愛い妹をもったのだろうか！

「……雪姫は僕のこと好き？」

「うん！」

「僕のどこがいちばん好き？」

僕はわくわくしながら雪姫に問う。

「なんか死んだ魚みたいな目してるところ……！」

……。

なんだろう、聞き間違いだろうか。えらくひどいことを言われたような気がする。

「……雪姫は僕のこと嫌い？」

「ううん、だいすきだよっ！　なんかね、おにいちやんの変な笑顔もおもしろくてだいすき！　あと、嫌いなピーマンを食べてる時の顔もおもしろいし、ゴキブリが出た時の泣きそうな顔もおもしろいよね！　あとあと間違えて洗顔クリームで歯磨きしたときとか

「

「も、もういいから……」

「えー、まだまだいっぱいあるのに」

そんな僕の駄目エピソードを嬉々として話されてもまったく嬉しくない。

なんだろう。僕の良いところは目とリアクションしかないのだろうか。どこに好かれる要素があるのかさっぱり理解できないので微塵も嬉しくない。

そもそも死んだ魚のような目って、いままでそんな目で見られていたのか、というか妹を死んだ魚のような目で見ていたと思われていたのか。あと変な笑顔って、僕の笑顔は笑われるほどおかしいというのだろうか。たしかに、笑顔が不気味だと初対面の女性に言わ

れたことはあるが妹にまでそう思われているのか。

なんだか混乱してきた。

僕がシヨックで唸っていると、妹が心配そうに下から覗き込んできた。切りそろえられた黒い前髪から覗く大きな瞳はどこか不安そうに揺れている。

しかし、なにかを決意したのかこちらを見据える瞳に強く鮮やかな光が灯る。

「おにいちゃん」

「……………うん？」

「ほんとはね、ほんとはねっ！」

「……………うん」

「……………ほんとはぜんぶだいすきだから！　世界でいちばんだいすきだよっ、おにいちゃん！」

！！！！

「　ゆ、雪姫……………！！」

「おにいちゃん……………！！」

「ゆきいいいいいい！！」

「おにいちゃあああああん！！」

「ゆううきいいいいいい！！！！」

「おぬいいちゅああああああ　　」

「玄関でなにやっとなのじゃ、ゴルアアアアアッ！！」

「「ぎゃああああああああ　　」

つて。

「か、母さん」

背後からの突然の怒声は母さんだった。母さんの頬は怒りのせいかほんのり赤く染まっていた。

「あんたたち玄関でなにイチャコラしてんのよ。恥かしいったらありやしないわ!」

「す、すいません」

「ご、ごめんなさい」

どうやら怒りというよりは恥ずかしかったらしい。

たしかに玄関で名前を呼びながら抱き合ってる兄妹は、傍から見ると相当恥ずかしいだろう。

つい妹の嬉しい告白に舞い上がってしまったが、もし近所に見られていたらそうとう恥ずかしい。

僕は恥かしさを誤魔化すようにさっさと家に入ろうと歩き出すと、後ろから服を引っ張られた。

振り向くと雪姫が、んっ、と言いながら手を差し出している。

妹の可愛らしい要求に、しっかりと手を握って答えてあげると、嬉しそうに抱き着いてきた。

「えへへ。おにいちゃんすきい」

そのまま抱きかかえ頭を撫でると、嬉しそうに目を細めた。

そんな僕らを母さんが呆れたように見ている。

「……晶、あんまり甘やかすと、雪姫が兄離れ出来なくなるわよ」

「いやあ、可愛い妹に優しくするのは兄の本能だから」

「うへへへ」

「……このブラコンシスコン兄妹め」

舌打ちが聞こえた気がしたが、兄妹仲良く笑いながら家に退避す

る。

母さんを怒らせると怖いが、なんだかんだといって雪姫に甘いのは母さんも同じだ。

後ろを振り向けばきつと仕方のない子供達に苦笑しながらも、優しく見守っている母さんの姿が見られるだろう。

見なくともわかる程に僕も母さんが大好きで、そして母さんも僕らを愛している。

なんて臭いことを考える。

なんだか泣いてしまいそうだった。

「おにいちゃん」

夜遅く僕の部屋に入ってきたのは、眠たそうに目をこする雪姫だった。とっくの前に寝たはずだが、なにか怖い夢でも見たのだろうか。

「どうしたんだ雪姫。ああ、あまり目をこすっては駄目だよ」

「……いつしよに」

雪姫の言葉は短かったけれど、意味を察した僕が頷きベットに促すと、もぞもぞと布団に入っていく。

しかし、布団からぴよこりと顔を出して僕をじっと見つめたまま寝ようとはしない。

「雪姫、はやく寝ないと明日起きられないよ？」

「おにいちゃんもいつしょ……」

「僕はまだ宿題があるから」

「うっ……」

僕の言葉に雪姫の顔が悲しそうに歪む。

しかし、兄としてそれを見て突き放せるはずがない。

……仕方がないか。宿題は忘れてもいいけど、雪姫を悲しませたら駄目だよな。

明日怒られることを覚悟し僕が布団に入ると、雪姫は安心したのかゆっくりと目を閉じていく。僕は雪姫がよく眠れるように優しく頭を撫でる。

ほとんど眠りかけているようだが、雪姫の手が僕に触れた瞬間、僕が逃げないようにぎゅっと服をつかんで離さなくなった。

雪姫は夢うつつのぼんやりとした声で僕につぶやく。

「おにいちゃ……」

「ん？」

「いなくなっちゃだよ……」

「……うん」

「おに……い……だい……すき……」

「僕も、僕も雪姫が好きだよ」

本当に泣いてしまいそうだった。

あどけない表情で、小さく寝息を立て始めた妹からそつと手を離す。

大好きな妹。きっとこれからも愛し続けるだろう。たとえ僕が妖怪でも狂人でも、変わらずに。

けれど、全てを雪姫に知られた時。僕はきつと傍にいられない。

僕が妖怪か、狂人なのか、それがはつきりしたとき。全てを包み

隠さず伝えようと考えていた。

自分でも馬鹿げていると思う。それを話したとして何の意味があるというのか。

けれど、それは僕が生まれてからずっと抱えてきたもので、僕の根幹に関わることだった。

だから、家族には知ってもらいたかった。知ってもらったうえで受け入れて欲しかった。

でも、受け入れられなかったら？

もうここにはいられない。ほんの少しでも家族から負の感情を向けられれば、僕はきつと耐えることができない。

不器用で脆弱な僕は、おそらく逃げ出してしまっ。

知らせないほうがいい。それがわかっていながらも、今の幸せを犠牲にしてまで自身が何者であるかということにこだわる必要がはたしてあるのだろうか。

けれど、妖怪であるという自覚だけは確固としてあり、それを証明できないという現状は、いつ崩れるともわからない地面の上に立っているようなもので、その崩壊とはすなわち自己の崩壊であった。

自我がなければ、他者との境界さえもはっきりしない。そうならば精神を保つことすら難しいだろう。

僕にあるのは途方もない衝動だった。

知りたいという欲求と、知らなければならぬという焦燥感が僕を突き動かしている。

それに抗えば苦しく、従えば不安が募る。

僕はどうしようもない本能と、予期される結末に精神を押しつぶ

されそうになりながら、ひたすら流されるまま、なされるがまま生きてきた。

その怠惰のツケはいつか支払わなければならない。

けど、今だけは。

未来のことなんて考えず、この無償の愛に浸ったまま眠りにつきたかった。

いつか来るであろう別離の時のために。

「おやすみ、雪姫。いい夢が見れますように」

そっとささやき、目を閉じる。

僕は途方もない暗闇の中で、小さなおやすみの声を聞いた気がした。

一、汝は覚者。無垢なる楊朱は岐に泣く（後書き）

あとがき

妹の登場です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7286r/>

---

無知の妖怪、未知の境界

2011年10月5日02時53分発行